

あいのて

平成25年12月3日発行

発行：京築教育事務所

人権・同和教育室
(TEL：0979-83-3602)

タイトル「あいのて」は、がんばっている人には絶妙のタイミングで“合いの手”を入れる、困った人には“愛の手”を差し伸べることができる、そんな人権・同和教育室でありたいと願ってネーミングしました。

はじめに

11月8日に平成25年度第2回福岡県人権教育研修会～学力と進路の保障～が行橋市立今元中学校でおこなわれました。今回の“あいのて”は、研修会の講演で多くのご示唆を頂いた福岡県人権研究所の谷口研二さんの講演内容の紹介を中心に作成しています。

また、個別的な人権課題（性的マイノリティ）についての内容や、最終ページには、授業で身につけたい「授業コミュニケーション力」についてを連載をしています。今回は「みる」についてです。是非、ご一読ください。

谷口先生からは70分のご講話をいただきました。すべての内容は紹介できませんので、抜粋したものを紹介します。



平成25年度第2回福岡県人権教育研修会～学力と進路の保障～（平成25年11月8日）
講演「コミュニケーションの危機と人権教育の可能性」

公益社団法人福岡人権研究所 事務長 谷口 研二

コミュニケーションの危機を感じる出来事

ある学校で、清掃時間に廊下の掲示物をぼーっとながめていた生徒に、担任が「ぼーっとしないで、掃除をしなさい」と声をかけました。するとその生徒は「先生、A君の水筒が壊れていました。」と答えました。その時、担任は「どうして、自分が注意された瞬間に、別の話題を出すんだ？」と思ったそうです。

また、ある学校では、朝の会で、担任が前日に起こった事件のニュースについて話しました。ところが、昼休みに、あることが好きな生徒がその事件の犯人の真似をして遊んでいる姿を見かけます。悪気は感じられません。担任は自分が伝えたはずの話の中身を全く無視して、話の一部だけをとらえて遊び化している行為に大きなショックを受けます。それと同時に「子どもたちの受け取り方を注意深く探りながら伝える」ことをせざるを得ない状況を感じ取ります。

このように、様々な場面で「伝えたはずの言葉が届いていない」とか「言葉があいまいで意味のないものになってきている」といったコミュニケーションの危機を感じます。



学びのプロセス 一何を問題だと思ふのかー

なぜ、コミュニケーション能力を育てないといけないのかというと、人々が幸せに暮らすために必要なコミュニティをつくることと、人々が幸せに暮らすためのエコノミー（経済）活動を具現化するためです。

コミュニケーション能力がない子どもたちがそのまま放置されると、コミュニティは壊れ、エコノミーは格差を是正できない、貧困の連鎖を断ち切れないという危ない状況をつくってしまうかもしれません。

こういったことは、気づく人がいるから問題にされるのであって、気づく人がいなければ、見過ごされてしまいます。部落問題にしても同じで、ある事象を前にして、「それはおかしい」と気づく人がいて、「それは問題だよ」と考える人たちが生まれ、「それは社会的な課題であり、ほっといちゃだめだよ」という人が課題解決のための実践を行う。

このように「気づき」→「考え」→「行動する」という学びのプロセスが必要です。教職員が日常の生徒の実態からコミュニケーション能力の課題に気づき、それを研究テーマに掲げ教科等を通して具体的な場面で取り組まれていることはまさに学びのプロセスが活かされていますし、（本日の今元中学校の授業では）生徒たちにも学びのプロセスを育てようとする授業を実際に見ることができました。（次ページへつづく）

マララさん(パキスタンの人権活動家)の生き方から



「本とペンを手にしましょう。一人の子ども、一人の先生、一冊の本、そして一本のペンが世界を変えることができる、教育こそ問題解決の唯一の手段である、教育を第1に！」今年の7月12日にマララ・ユスフザイさん(16)が国連で演説した言葉です。また、昨年12月に国連は「人権教育および研修に関する国連宣言」を採択して、人権教育が学校教育の基盤であることを改めて発信しました。マララさんの言葉とぴったり重なります。また演説の中でマララさんは次のようにも述べています。「もし私の目の前に私を撃った人がいて、私が銃を持っていたとしても私は彼を撃たないだろう。私を撃った人の子ども達に教育を。」この言葉の中には、「自分は被害者だけど、加害者が自己変革をすることを全面的に支援する、その手段は銃ではなく教育である。」という強いメッセージが読み取れます。これは、まさに第三次とりまとめで提起されたコミュニケーションの4つの部屋（下はそれを整理した図です）の中の「非攻撃的自己主張」のスキルと重なる言葉です。

今の子ども達には、トラブル解決の手段としても、この「非攻撃的自己主張」の力を育てていくことが大切で、具体的な場面を通して、このスキルを指導しておけば、子どもたち自らが自己解決できるようになり、先生達も日常の教育活動の効率や質が上がってくることに繋がります。

わたしOK	
[B]	[客・主・提・選]
攻撃的自己主張（「あなた」メッセージ）、勝者型、優越感	非攻撃的自己主張（「わたし」メッセージ）、勝負なし型、共生、協働
あなたNO	あなたOK [A]
自己否定・他者否定 自暴自棄	沈黙、消極的、受け身、他人任せ 敗者型、劣等感、無力感
[C]	[D]
わたしNO	

スイッチの入れ方を教えよう



人権を大切にするという価値観はある程度内面化されています。子どもたちも、人権を大切にすることは「知っている」のですが、行動に移すためのスイッチの入れ方が分からないのです。つまり、行動に移すために必要なスイッチをどのように入れるかが人権教育の課題です。差別意識は誰も心の内に存在すると考えるならば、それが差別行為になってしまうにもスイッチがあります。そのスイッチは「同調と傍観」という行動特性がきっかけとなり入ってしまいます。「みんなそうしているから私も」や「わたしのせいじゃない」という個人の思考停止、判断停止の状態が、差別行為や暴力行為の動機付け（スイッチ）になってしまいます。このようにならないためにも福岡県の人権教育で言われてきた、子どもたちに「達成体験を積み重ねる」、「人生モデル・成長モデルと出会わせる」、「重要な他者から褒めてもらったり、叱ってもらったりする」ことが必要です。また、自分と同じ考えを持った他者とのコミュニケーションだけでなく、自分と違う考えを持った他者とのコミュニケーション能力を育てることも重要です。

学力形成とコミュニケーション能力



学力を形成するということと人権感覚が身に付くことはセットです。身近な言い方をすれば、「学級がうまくいっていると学級の学力があがる」「人間関係にトラブルが減ってくると学力があがってくる」「分からん子が教えてと言うと、分かる子がいいよと言って教える、そういう関係が見えてくると学力形成にきつと影響する」「いじめが頻発するところは、問題をスルーする子といじめられて

いる子は勉強どころではないので、格差が開いてくる」そんなことが考えられますよね。この背景は第三次とりまとめにも「効果のある学校」としてまとめられています。お互いの人間関係にトラブルが無ければお互いの学び合いも豊かになるということです。「学び」とは100人いれば100通りの学びがあります。その個人個人の学びを交流し、新たな「学び」を生み出すということは、学校の中で集団で「学ぶ」メリットを活かしていることの表れだと思います。

国際的な潮流の中で、人権教育はメインストリームである、「サブカルチャー」や学校教育の一分野なのではなく、あえてベースであるという感覚でないと地球的な人類的な危機の改善には至らないという認識がある。

○わが国における「持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」実施計画（2006(H18)3.30）

問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方を重視して体系的な思考力（システムシンキング）を育むこと

批判力を重視して、代替案の思考力（クリティカルシンキング）を育むこと

データや情報を分析する能力、コミュニケーション能力の向上を重視すること

また、人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重といった持続可能な開発(発展)に関する価値観を培うこと

重要

自尊感情「わたしOK!」はなぜ必要か

自尊感情はそれ自体が目的ではありません。自尊感情が必要な理由は2つあります、1つは学力形成の基盤、もう1つは「市民力」形成の基盤だからです。「市民」という概念を私は「『同調と傍観』に流されない人のこと、つながる力を持った自立した個人」のことと考えています。「私OK!」という自尊感情が育てば、チャレンジ精神が生まれ新たなことに挑戦する、挑戦すれば失敗も経験する、しかし、また立ち直る力も育つ、そして失敗を恐れない挑戦意欲がさらに生まれてくる、このような段階を踏む中で「市民」となるためのコミュニケーション能力も育ちます。

体験と体験の言語化を



教育活動で大切にしたいことの1つ目は、体験を重視すること。特に、人間や動物、植物の生き死に関する心の動きの体験をたっぷりさせる。二つ目は、体験の言語化。自分は「何を体験したか」「そのとき何を感じたか」「何を考えたか」「これからどんなふうになりたいか」。事実の言語化、感情・考えの言語化、ニーズの言語化をていねいに支援することによって、体験や言葉、人権感覚が「身に」付くのだと思います。

最後に(今元中学校の)三年生の社会科の授業で紹介された詩「ハチドリのはとすく」を紹介します。

ハチドリのはとすく

森が燃えていました。
森の生き物たちは、
われ先にと逃げていきました。
でもクリキンディという名の
ハチドリだけは、行ったり来たり
口ばしで水のしずくを一滴ずつ運んで
火の上に落としていきます。
動物たちはそれを見て
「そんなことをしていったい何になるんだ」
といて笑います。
クリキンディはこう答えました。
「私は、私にできることをしているだけ」

個別的な人権課題について(性的マイノリティー)

京築地区社会教育関係団体
リーダー人権教育研修会より

「自分は運動会(体育)がいやだ!」と、子どもが訴えました。なにがあったのでしょうか?

「体育が苦手だから」「身体の調子が…」「友達が…」「家庭の事情」・・・など、いろいろな要因が考えられると思いますが、その要因の一つに「性同一性障害」があげられます。「性同一性障害」とは、『性の自己意識(心の性)と生物学的性別(身体の性、解剖学的性別)が一致しない状態』のことです。学校の中には、水泳をはじめ、制服、宿泊行事、名簿や列の取り方など男女の区別が際立つ様な場面がたくさんあり、性同一性障害の人にとっては、生きづらさ、息苦しさを感している場面がたくさんあると言われています。

「LGBT」って、なに?

LGBTとは、Lはレズビアン、Gはゲイ、Bはバイ・セクシャル、Tはトランスジェンダーのことで、性的指向や性同一性障害等の性的少数者を表しています。

昨年度、日本で7万人を対象に行った調査では、LGBTの人は約5.2%、つまり20人に1人がLGBTだったということです。これを学校に置き換えると、各クラスに1人か2人はLGBTの児童生徒である可能性があるということです。決してテレビの中のことではありません。「見えていないんだけど、必ずいる」と認識を変える必要があります。

どんなことに、困っているの?

性同一性障害の子どもは、日常のあたりまえと思われている次のようなことに息苦しさを感していることがあるそうです。当事者の思いを知ることが大切ではないでしょうか。

- 色分けされたクラス分け表や男女別の名簿
- 更衣室やトイレの活用
- 運動会での応援合戦(男女で内容がわけられる)
- 男女別の呼び方(○○くんと△△さん)
- 教師の何気ない言葉や指導内容
- ・「教師自らが性同一性障害の芸能人のまねをし、受けねらいをする」など

半数以上の人自殺を考えた…約3割が不登校に…

性同一性障害の実態はあまり知られていませんが、半数以上の患者は小学校入学前から自分の性に違和感を感じているといわれています。岡山大病院ジェンダークリニックの中塚幹也教授らが1999~2010年にかけて性同一性障害の患者1167人を対象に行った調査からは、自分の性に違和感を覚え始めた時期は中学校卒業までが90%、FTM(からだの性が女性で、心の性が男性)の患者に限ると小学校入学前が70%にも達しました。「半数強が物心つくころには違和感を持っている」ことがわかりました。また、そのことで自殺しようと思った人が59%、そのうち実際に自傷や自殺未遂をしたことがある人が28%、不登校になった人が29%など、苦悩の深さがうかがえます。私たちは、この子どもたちの思いにどれだけ気づけているでしょうか?「知らない」ということで、知らず知らずのうちに相手を傷つけてしまっているということはたくさんあります。性同一性障害や性思考に関する偏見・差別もその一つです。まずは、性同一性障害や性の多様性等について関心を持ち、正しく理解していくこと、そして、当事者とその周りの人々の思いや願いを知ることが大切です。





このコーナーでは「きく・みる・話す」について考えていきたいと思えます。「きく」「みる」「話す」は、人間の言語活動の中で最も基本的なコミュニケーションです。しかし、ちょっと教師が意識を変えるだけで子どもに変化が表れるのです。第2回では「きく」、第3回では「話す」について紹介しました。今回は「みる」について紹介します。

みる

ともすれば、私たち教師は話（指導案）の内容にとらわれて、それを言い終わる（終了させる）ことに使命を感じ、えんえんと授業を行ってしまいがちです。それでは子どもは「おいてけぼり」です。授業の達人は子どもを見て、子どもがどのように判断して行動するかを悟り、それにすばやく対応することができます。つまり、子どもを見るのが大切なのです。下の漫画を見てください。この漫画の先生は子どもを「見」て、自分の思い込みで勝手に子どもを「診断」し、手立てを打っています。これでは子どもの気持ちを察することができません。論語に「視・観・察」という言葉があります。

視・・・その人の行動を観察すること。
観・・・その人の行動の動機を調べること。
察・・・その人がその行為に満足しているかどうかを知ること。

この「視・観・察」を使って子どもを「診る」（診断する）ためには、「視・観・察」の際に子どもをしっかりと「解釈する」必要があります。



ぼーっと楽しそうな外の体育を見ています。もしかしたら、「授業がつまらない、問題がわからない」といったSOSのサインかもしれません。もしかしたら、すでに難しい問題を解き終えて「もっと解きたいなあ」とひと休みをして打診とが大柄な感ぜずた番券の授業が退屈なのであれば、授業展開や内容を見直してみる。解き終わって暇な子がいる場合は、ステップに応じた応用プリントを用意するなど、様々な手立てを考えてみる必要があります。

授業の達人は「子どもを見るに尽きる」と述べています。それは、子どもをよく見ていないと独りよがりになるからです。すなわち、子どもの反応をよく見ていると授業のもって行き方を変更したり、授業構成を前後させたり臨機応変に対応できるようになります。また、子どもの表情や態度をよく見ると、子どものその時の状態がわかります。そこで、わざと脱線させたり、興味を引きつける教材を提示したりして、一時弛緩させた後、集中を再び高めるといった工夫ができます。達人達は実によく子どもを見ています。そして子どもの反応によって授業形態を変えています。これは達人が様々な形をした授業スキルをたくさん持っているということに他なりません。